

北九州市立大学
文学部紀要

第94号

「あいだちなし」考

渡瀬 淳子

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2024

「あいだちなし」考

渡瀬 淳子

はじめに

中古から近世まで長く用いられた「あいだちなし」という語がある。古い用例は『源氏物語』に三例ほどしかなく、中世の間も文学作品にさして用いられることはなかった。日常的にもあまり用いられなかったのか、日葡辞書には立項されていない。ところが、近世になると浄瑠璃や俳諧などに「あいだてなし」の形で用例が見られるようになるので、日常語として定着していたものとも思われる。日常語、つまり通俗的表現だったために、俗語による文芸が発達するまで文学作品にはあまり使われなかったのかもしれない。そのため、古い時代にどのような意味の語として用いられていたかが曖昧になっているようである。

辞書を調べると意味は大きく二つに分かれている。代表例として小学館の『日本国語大辞典』¹⁾を見てみよう

①味もそっけもない。おもしろみがない。無愛想だ。

②遠慮がない。ぶしつけだ。

一見、何も問題がなさそうに見えるが、無愛想なのと遠慮がないのでは、態度の悪さを表現していてもその性質は正反対なのではないだろうか。特に、『日・国』では（その他多くの国語辞典・古語辞典でも、だが）、源氏物語の用例三つが、それぞれこの二つの意味に振り分けられている。同時代の、ひとまとまりの作品の中で、「愛想がない」と「遠慮がない」の正反対の意味に用例が割れるということがあるだろうか。

そこで、今回は中古・中世の用例を中心に、「あいだちなし」はどういう意味の語だったのか、なぜ正反対の意味が二つ並ぶことになったのか、考えてみたい。

『源氏物語』の場合

「あいだちなし」の最も古い用例は『源氏物語』²⁾のものであり、困ったことにこの他には古い時代の物語に用例を確認できない。「あいだちなし」が用いられているのは全部で三箇所である。現行の巻の並び順に「螢」「夕霧」「宿木」となる。それ

それぞれの場面なのか確認しておきたい。

「蛩」巻

五月のある日、光源氏は六条院の馬場で騎射の競技を行わせ、女性たちも揃って見物する盛儀だった。その夜、光源氏が馬場のある夏の花散里のもとに泊まる場面である。

いまはたゞ、おほかたの御むつびにて、おましなども、ことごとくにておほとのごもる。「などで、かく、はなれそめしぞ」と、殿は、くるしがり給ふ。おほかた、なにやかやとも、そばみ聞え給はで、年ごろ、かく、折ふしにつけたる御あそびどもを、人づてに見きき給ひけるに、けふ、めづらしかりつることばかりをぞ、「此町のおぼえ、さらしくし」と思したる。

そのこまもすさめぬ草と名にたてる汀のあやめけふやひきつる

と、おほどかに聞こえたまふ。なにばかりのことにもあらねど、「あはれ」とおぼしたり。

にほどりのかげをならぶるわかごまはいつかあやめにひきわかるべき

あいだちなき御ことゞもなりや。

「あさゆふのへだてあるやうなれど、かくて見たてまつるは、心やすくこそあれ」、たはぶれ言なれど、のどやかに

おはする人ざまなれば、しづまりて聞こえなし給ふ。

花散里は桐壺帝に仕えた麗景殿の女御の妹であり、光源氏とは若い頃からの付き合いで、夕霧や玉鬘の母親代わりを任されるなど、源氏に信頼された女性である。物語中では穏やかで控えめな性格とされており、容姿に恵まれないこともあって、源氏の訪れが間遠であることについて文句を言うこともなければ不満を態度に表すこともない。しかしそれは花散里が屈折した感情をため込んでいるということではなくて、彼女はとうに源氏との性的関係に見切りをつけており、その状況に満足しているようなのである。この和歌のやりとりは自分自身を「駒もすさめぬ草」つまり男性に相手にされない女と捉えており、かなりあけすけである。光源氏の返歌もそれに応じて、あなたと別れることはないと率直に伝えており隔てのない関係が読み取れる。ならばここは「遠慮がない」と解釈しておいて問題はなさそうである。

では、従来この場面がどのように読まれてきたかにも注目してみたい。一条兼良の『花鳥余情』⁴は以下のように注釈している

あいたちなき御ことゞもなりや たいの御かたの哥ハ、駒もすさめぬとよミ給て、源氏のすさめ給はぬことをほのめかし、源氏ハ又にはほとりかけをなしふるといひて、女房に似ておとりたれともひきわかるましきとの給へり。いづれもあいたちなき御かたなりと物語の家にかきと、めたる也

解釈してみると、「対の御方（花散里）の歌は「駒もすさめぬ」と詠んで源氏との交渉がないことをほめめかし、源氏は「にほとりにかけをなしふる」と言っていて、花散里を「妻というより女房（使用人）みたいで劣っているけれども別れまい」と仰っている。どちらに対しても遠慮のない方々であると、物語の家の説に書いてあったのである」となるだろうか。お互いの和歌の表現が率直であることを言っているようだ。

三条西家流の『細流抄』は「花ちるさとはわが愁を云ひ出し、源も夫婦の間の事ばかりのたまへり。いづれも優ならざる歌と也」とある。花散里は源氏に相手にされない我が身の辛さを直接的に訴え、源氏は夫婦仲のことばかりを仰っていて、どちらも優美な趣のない歌だという批判である。

九条種通の『孟津抄』も「世俗にあいだてないと云ふ事の類也。」としていて、「俗にあいだてないと云われる類いである」と言っている。「あいだてない」については後に述べるが、ここでは「無遠慮」の意としておいて問題ないだろう。

里村紹巴の『源氏物語抄（紹巴抄）』（奈良女子大本 文禄四年写）は、

あいたちなき 無風流と云詞歟。源ハ夫婦などの躰。花は又駒もすさめぬなど、述懐をありくとあそはすは無風流とにや。如何

としていて、「風情がない（無風流）」としているようだ。夫が相手をしてくれないという嘆きを率直に述べているのが風流で

ないと評価されている。遠慮のなさから派生した意味と考えるとよさそうである。

以上見てきたように、この部分の解釈は揺れが少なく、現代でも「遠慮のないお二人の歌だ」（岩波文庫 二〇一八年）という解釈で通っている。

「夕霧」巻

これまで浮気をしたこともない誠実な夫であった夕霧が、柏木の未亡人落葉宮に入れあげているのを、妻の雲居雁が嘆く場面である。

うへは、まめやかに心うく、「あくがれたちぬる御心なめり。もとより、さる方にならひ給へる、六条の院の人くを、ともすれば、めでたきためしにひきいでつ、心よからず、あひだちなき者におもひ給へる、わりなしや。われも、むかしより、しかならひなましかば、人めもなれて、中くすぐしてまし。『世のためしにしつべき御心ばへ』と、親・はらからよりはじめたてまつり、めやすきあえ者に、し給へるを、ありくては、すゑにはぢがましきことやあらむ」など、いと、いたうなげいたまへり。

中世の注釈では、『弄花抄』は「雲井を、夕霧の思ひ給ふを、わりなしと也（雲居雁のことを「あいだちなきもの」と夕霧がお思いになるのを、雲居雁は理屈に合わないと思っ

ある」となっていて、「あいだちなし」の意味を拾っていない。時代が下って『万水一露』でも同様に、「心よからすあいだちなきものに思給へるわりなしや／雲居雁を、夕霧の、心に物ゑんしし給とおもひ給は、わりなしやと也」となっていて、「あいだちなきもの」の意を拾っていない、もしくは「物ゑんし（何かを恨むこと）」の意と取ってるようだ。

『紹巴抄』は「六条院の人々を あまたの中なたらかなるとためしに引給へり。夕は実法なりとて也。あまたもなきとて心よからす雲ゐを恨たまふ、わりなしや也。あひたちもなきとて也」とあり、「あひたちもなきとて也」とそのまま解説に用いられている。「あひたち」が何の意味なのか説明がないところを見ると、このままで問題なく通じる表現だったものと思われる。そして、その意味は後に見るように、「わきまえがない。無分別だ。無慮だ。無思慮だ。考えがない。」もしくは「わがままだ。勝手気ままだ。」等の意で用いられていたものと思われる。この説明では、以下のようなことが解説されている。「夕霧は六条院の女性たち（父光源氏の妻妾たち）を、寵愛を競う女性が大勢一緒に暮らしているのに皆の關係が穏やかである例として引き合いに出している。夕霧は真面目な男だから妻の他に通う女性が大勢いるわけでもない（実質、雲居雁の他には落葉宮一人である。藤典侍は所謂「妻」という認識ではない）からである。それなのに浮気を責められては気分が良くないので、雲居雁の狭量を恨んでいるのだが、それが雲居雁から

すれば浮気をされた上に咎めれば文句を言われるなんて理屈に合わないと思われるのである。夕霧からすれば雲居雁の態度はあまりにもわがまま（もしくは無分別）だというのである」となるだろうか。雲居雁が夕霧のことを「あひたちもなき」と思っているようにも読めるのだが、「あいだちなし」は、本文では、雲居雁が自分が夕霧からどう思われているかを述べる部分に出てくる語なので、注釈の文章もこのように理解しておく。⁷⁾

肖柏の『一葉抄』⁸⁾では「あいだちなき 神妙ならぬよし也」とある。神妙でないというのは「けなげでない」「おとなしくない」等の意と思われるので、ここでも夫の浮気に文句を言う雲居雁の態度が、遠慮がないと受け取られていると見てよいだろう。

近世初期の『湖月抄』（北村季吟、延宝元年版本）では「あいだちなきものに」に「抄 愛のなきなり」と注が付いていて、この当時の諸注釈⁹⁾では一般的に愛想がない、可愛げがないの意と取られていたようだ。賀茂真淵は『源氏物語新釈』で あいだちなきものに だちはあだつといふに同じく愛敬だつさまなきといふなるべし（夕霧）
と言っているので、中世の末から近世の初期頃に「可愛げがない」とする解釈が優勢になり、真淵の頃にはすっかり定着していたものと考えられる。

以降、最近の岩波文庫版に至るまで、「ひねくれたかわいげ

のない女だと思っていらいっしやるのは……」（岩波文庫二〇一九年）という「可愛げがない」の意とする解釈が主流になっている。

ただ、「私を気に入らず奥ゆかしさのない者と思っていらいっしやるが……」（中野幸一『正訳源氏物語』勉誠出版 二〇一六年）と、「遠慮がない」から派生した意で解釈するものもあり、それで問題なく解釈できているのである。

夕霧は常に父光源氏の妻妾たちである「六条の院の人びと」を、「めでたきためし」として挙げ、それに対して雲居雁を「心よからずあいだちなきもの」と思っているという。夕霧は、六条院の女性たちが、光源氏の女性関係についてとがめ立てをせず、互いに波風を立てないように過ごしている態度を賞賛しているのだが、雲居雁は浮気をする夫にはっきりと文句を言う人である。ほぼ身寄りがないか、あっても圧倒的に身分が低く、光源氏の愛情に頼るよりほかない六条院の女性たちに対して、雲居雁には太政大臣の父という盤石な後ろ盾がある。六条院の女性たちが必然的に光源氏に対して遠慮せざるを得ない立場なのに対し、雲居雁は夫に遠慮する必要のない立場にいるのである。だからこそ、彼女は夕霧に真っ正面から不満をぶつけると言っているのだから、ここもやはり遠慮がないの意で取るべきであろう。

「宿木」巻

最後の用例は宇治十帖の「宿木」である。宇治の姉妹のうち、薫が思いを懸けていた大君は亡くなり、中の君は匂宮に引き取られる。亡き大君の面影を忘れられない薫は、中の君に大君の面影を見出して懸想してしまう。中の君は匂宮の初めての子を懐妊しており、まもなく出産を迎える。その五十日の祝いが済んだ頃、匂宮の留守を狙って薫が中の君を訪れる場面である。

…みづからも、れいの、宮のおはしまさぬひまに、おはしたり。心のなしにやあらむ、「今すこしおもくしく、やんごとなげなるけしきさへ、そひにけり」とみゆ。「いまは、さりととも、むつかしかりしすろ事などは、思ひまぎれ給ひにたらむ」と、思ふに、心やすく、たいめし給へり。されど、ありしながらのけしきに、まづ涙ぐみて、「心にもあらぬまじらひ、いとゞ、思ひのほかなる物にこそ」と、世を思ひ給へみだるゝ事のみなむ、まさりにたる」と、あいだちなくぞ愁へたまふ。

『紹巴抄』では「あひたちなく ことの外なる事也」とあって、薫が中の君に愚痴をこぼす態度について、程度が甚だしいさまと取っている。

『湖月抄』では「あいだでなくなりあぢきなしとおなじ」と本文の右に傍書してあるが、「あぢきなし」と同様としている

ところをみると、「風情がない」「苦々しい、不快である」というような理解かと思う。

賀茂真淵は『源氏物語新釈』（続群書類従完成会 賀茂真淵全集一三・一四巻）で

あいだちなく 俗に心もせて人に類に物をいひ付などする
をあひたてなしといへる。即是にてこ、は薫の今は前の心
もまぎれつらんと思ふに猶類にうれへのみの給へばいふな
り。然らば此語は問へだてなくの意か。又愛だつ事なきて
ふ意か。今は仮字のみだりになりたればうたがはし。愛は
あい、間はあひだなり。猶其意を考て定むべし（やどり
木）

と言っているが、冒頭に「俗に心もせて人に類に物をいひ付けなどするをあひたてなしといへる。（一般的に、気配りもせず人に頻繁に用事を言い付けたりするのを「あひたてなし」と言っている）」とある部分に注目したい。「あいだてなし」の意味は「①度が過ぎるさま。むやみやたらだ。途方もない。②わきまえない。無分別だ。無遠慮だ。無思慮だ。考えがない。きまえない。③遠慮がない。ぶしつけだ。④わがままで。勝手気ままだ。⑤盲目的にかわいがるさま。猫かわいがりだ。」の五つが挙げられているが、ここでは相手の状況も考えずに用事を頼む態度を言っているので、「わきまえない」「遠慮がない」の意であろう。一般的にはそのように使用されるはずの語が、この場面では、中の君が薫について「前の心」つまり、以前からの懸想も

女二宮と結婚した今となっては解消されただろうと思っていたところ、薫が何の憚りもなく愚痴をこぼす態度を、「あいだちなく」と言うのである、としている。「然らば此語は問へだてなくの意か。又愛だつ事なきてふ意か（そうすると、この語は「問へだてなく」の意味だろうか、それとも愛らしさのないことを言う意だろうか）」とあるので、真淵の解釈は現行の辞書のように、「隔てがない（遠慮がない）」のか「愛想がない」のかをめぐって揺れていたと思われる。彼が意味を決定する拠り所にしようとしたのは語源で、「間（あひ）」と「愛（あい）」では本来仮名遣いが違うのだが、現在では仮名遣いが乱れているのでそれも疑わしいと嘆いている。

現在では、岩波文庫版に「身も蓋もなく愚痴をこぼされる。「あいだちなし」は気兼ねしないさま。」とあるように、「隔てがない」の意で取るのが一般的¹²なようである。岩波文庫版は参照として螢巻を引くが、夕霧の用例は例外としているようだ。（岩波文庫 二〇二〇年）

この場面をもう一度見てみよう。宇治の大君亡き後、薫は残された妹の中の君に亡き大君の面影を見て懸想し始める。匂宮の妻となって初めての子を懐妊中の君には、薫の愛情は迷惑なばかりである。そのうち薫にも縁談が持ち上がり、今上帝の女二宮と結婚する。一方、無事に出産を終えた中の君は、祝いに来た薫を見て、家庭を得て安定した今は以前のように懸想を仕掛けてくることもないだろうと安心し、昔なじみの気安さ

から対面する。そうすると、薫は相変わらず大君を忘れられず世を憂えている様子で、皇女とのめでたい結婚に対しても「心にもあらぬまじらひ（気に染まない結婚）」と言う始末。その薫の態度が「あいだちなくぞ愁へたまふ」とされているので、昔なじみであり、亡き大君の思い出を共有する中の君への親しみから、薫が遠慮なしに悩みを打ち明けたものと取れる。やはり「こころの隔てがない」「遠慮がない」の意で取って不都合はなさそうだ。

以上、『源氏物語』の用例は、全て「隔てがない」から発する「遠慮がない」の意味で解釈できるのである。

『増鏡』の用例

次に「あいだちなし」の使用が確認できるのは、『源氏物語』から三百年以上が経過した一四世紀後半になってからである。

『増鏡』第二「新島守」を見てみよう。

建久の初めつかた、宮こにのぼる。その勢ひのいかめしき事、いへばさらなり。道すがら遊びものどもまいる。遠江の国橋本の宿に著きたるに、例の遊女、多くえもいはず装束きてまいれり。頼朝うちほほむみ、

橋本の君になにか渡すべき

といへば、梶原平三影時といふ武士、とりあへず、

ただ柚山のくれであらばや

いとあいだちなしや。馬鞍こんくくり物など運び出でてひけば、喜びさわぐ事かぎりなし。

ここも従来解釈が揺れている。『増鏡』の早い注釈は明治三〇（一八九八）年刊の和田英松・佐藤球『増鏡詳解』（明治書院）である。ここには次のようにある。

○あいだてなしやは。無間隔にて、差別なきをいふ。源氏物語宿木巻に、世を思ひたまへ思ひ乱る、事のみなんまさらにたると、あいだちなくぞうれたまふ、とある詞に同じく、やは歎辞也。頼朝景時主従の間、隔心なき意なるべし。（明治三二年五月刊の訂正再版も同様）

「無間隔」つまり隔てのないさまを表す言葉として解釈しており、参照すべき用例としては先に見た『源氏』の「宿木」を引いている。宇治の中の君と薫の間柄が心理的に遠慮のいらぬものだったように、頼朝と梶原景時の間柄もまた、心に隔てのない親密な関係だったという理解である。

ところが、同じ校注者による『増鏡校注』（和田英松『増鏡校注』明治書院 大正一四年）では以下のように解釈が変わっている。「○あいだてなしやーあいそげなしの意。やは歎辞。」また、同じ和田英松・佐藤球『重修増鏡詳解』でも、

○あいだてなしや 愛想げなきことよの意。源氏物語宿木巻に「世を思ひたまへ乱る、事のみなんまさらにたると、あいだちなくぞうれたまふ、」とある詞に同じ。やは歎辞也。景時の附句の、くれずしてあらばやといへるが、い

かにもソツケなきをいへるなり。但し、景時も、もとより、さる心にあらねど、唯かく反対にいへるに、歌の興はあるなれど、その歌のみの評語に、かくいへるなり。(和田英松・佐藤球『増鏡詳解』重修六版 明治書院 昭和三(一九二八)年)

となつてゐる。景時の付句の評価が「いかにもソツケなき」と変化しており、頼朝と景時の関係性も捉え方が変わつてゐるこゝとが分かる。しかし、『源氏物語』の用例は以前のままであり、この解釈については何も触れられてゐない。加えて「但し、景時も、もとより、さる心にあらねど……」と解説の歯切れも悪い。「愛想がない、素っ気ない」の意味で解釈するのは無理があるのではないか。調査の都合上第六版までしか遡れなかつたのだが、重修版の初版は大正一四年に刊行されており、この段階で「あいだてなし」の意味が真逆に修正されていた可能性が高い。なお、六版と同じ年に刊行された和田英松・石川佐久太郎による『増鏡通解』(昭和三(一九二八)年)も、「あいだてなしや―愛想のない事よ」としてゐる。

この変化はいつから起こつたのだろうか。他の注釈も見てみると、武笠三の校訂による『水鏡・大鏡・増鏡』(有朋堂文庫 大正元年刊)では「あいだてなし 主従の隔なし」となつてゐる。有朋堂文庫の序文で武笠三自身が「増鏡は関根正直氏校訂本及び和田英松佐藤球両氏の増鏡詳解を参照せり。」と書いてゐるから、この時点までは『増鏡詳解』も「隔てがない」の

意味で解釈してゐたことが確認できる。池辺義象『水鏡・大鏡・今鏡・増鏡』(校註国文叢書第九冊、博文館、大正三(一九一四)年刊)は「あいだてなしや 主従の間隔なく打解けたるをいふ、やは歎辞也」となつており、物集高量の校註による『今鏡・増鏡』(新釈日本文学叢書第八巻、日本文学叢書刊行会、大正一二(一九二三)年刊)では「あいだてなしや 主従の隔てなく打解けたるをいふ、「や」は歎辞也」となつてゐて、ここまでは「隔てがない」の意が主流のようである。和田英松が解釈を変えるのが大正一四年なので、どうも大正の末頃に解釈の転換点が来るようなのである。

その後は「愛想がない、素っ気ない」の解釈が定着し、佐成謙太郎『新訂要注 増鏡』(三省堂、昭和九(一九三四)年)では「○あいだちなし―愛想がない。」となつてゐる。佐成謙太郎は星野書店からも『増鏡通解』(昭和二三(一九三三)年)を刊行しているが、やはり「◇あいだちなしや―愛想のないことだ。「や」は感動の助詞。」としてゐて、訳は「それでは、実に愛想のないことである。」となつてゐる。大正元年には「隔てがない」派であつた有朋堂の注釈も、校注者が変わつて塚本哲三『通解増鏡要抄』(有朋堂 昭和一〇(一九三五)年)になると「○あいだてなしや 愛想のない事よの意。「あいだちなし」ともいふ。分別なし、愛想なし等の意の語。」となつてゐる。ただ、どうして大正の末頃に解釈が変化し、昭和以降は「愛想がない、素っ気ない」の意で解釈するのが定着してし

まったのかについて、原因といえるものは現時点では見いだせなかった。

だが、この場面の「あいだちなし」を「隔てがない」の意で解釈するのは間違いなのだろうか。源頼朝は建久元年に後白河上皇の招きによって都へ上ることになった。鎌倉から家来たちを率いて上京の途中、橋本の宿まで来ると、美しく装った遊女たちが大勢集まって頼朝ら一行を出迎える。そこで頼朝の発句に対して、側近の梶原景時が即座に脇句を付けたというエピソードだが、現行の解釈はほぼ「愛想がない」としている。「橋本の君になにをか渡すべき（橋本の遊君たちには何を贈つたらいいかな）」という句に対して、「ただ杣山のくれであらばや（杣山から切り出した「樽」ではないけど、何も「くれ」ないで「暮れ」ないうちに出発したいものです）」と正反対の句で切り返したところが、「愛想がない」とされる所以だろうか。『吾妻鏡』にいくつかの女性関係のトラブルが記されるように、頼朝が女好きであったことや、景時の付句を無視するように実際に高価な贈り物があったことも解釈を補強しているように思う。しかし、和歌の贈答や連歌では、相手の句を巧みに切り返すのはテクニックの一つであり、失礼なことでも非難されることでもない。加えて、頼朝の句と景時の句は言葉の上で見事に対応しているのである。頼朝の句では「橋」と「渡す」が縁語の関係、景時の句は「杣山」と「くれ（樽）」が頼朝の句の「橋」と縁語の関係になっており、言葉の縁で前句にぴったり

付いている。しかも縁語や掛詞を駆使した句を「とりあへず（即座に）」付けて見せるところは景時の機知や頼朝との息の合った親しさを感じさせる。

これは頼朝の奢侈を景時が諫めたのだという評もあるが、このような遊女の出迎えに対しては気前よく贈り物をするのが権力者としてのスマートな振る舞いである。頼朝は鎌倉殿という坂東の統括者というのみならず、平家を滅ぼし奥州を制圧して日本の武士の統括者というべき立場を手に入れた。今回は後白河上皇の度重なる要請に応じる形で上京するのであり、道中を含め、その振る舞いには当然世間の注目が集まっているはずである。ここで贈り物をケチって主君の男を下げさせるような諫言を家来がするだろうか。頼朝一行は、主な宿駅で歓待されることを前提に、相応の贈り物を用意しているはずだから、ここでは豪華な贈り物を前に洒落の効いたやりとりをしているとみるべきである。であれば、「あいだちなし」の解釈は「遠慮がない」で問題ないだろう。即興で付けたにもかかわらず言葉の縁で前句に見事に対応しているうえ、主君の発言に阿るようなところのない景時の付句に、語り手は主従の隔たりのない親密さを見て取ったのだろう。解釈は「隔てがない」とするのが適切だったのである。

このように解釈が変化した原因について、明確な理由は分らないままである。ただ、頼朝が冷徹な支配者とみなされてきたこと、梶原景時が讒言によって人を陥れる佞臣として評価さ

れてきたことの、解釈に与えた影響は大きいのではないか。このやりとりから読み取れるのは主従の隔てを越えた、気心の知れた仲間同士の親密さである。頼朝と景時の間にそのような交流があったということが理解できなくなったことも、「愛想がない」の解釈を強固なものにしているのだろう。従来の解釈に戻すことによって、この二人の間にも、冷徹な主君とその影で人を陥れて回った佞臣の関係ではなく、血の通った温かい人間関係が見えてくるのではないだろうか。言葉の解釈は内容の理解に大きく影響を与えるのである。

「あいだちなし」とは何がないのか

「あいだちなし」は、先に紹介したとおり、『日本国語大辞典』では意味が二つに割れていたが、『古語大観』では「あいな・し【間立無】とし、「あひー(形・ク活)」として、歴史的仮名遣いでは「あひたちなし」が妥当という説を採っているようだ。『源氏』の古写本が概ね「あいたちなし」と表記していることが、語源を「愛立無」に求める「愛想がない」説の有力な根拠になっているようにも思うのだが、その点については「補説」で「語源を「愛立無」(歴史的仮名遣は「アイー）」とする説もあるが疑わしい」としている。『古語大観』は、意味として「①こころの隔てがない。率直である」「②あからさますぎて奥ゆかしさが無い。無遠慮である」の二つの解釈を載

せている。どちらも遠慮のない様子から派生した意味となっていて、矛盾がない。原義は「こころの隔てがない」ところにあると捉えているようだ。ちなみに、①の用例としては源氏の蜚巻を、②の用例として同じく宿木巻を引いている。

そうすると、意味の上からは、「間立・間隔」に由来する「心の隔てのなさ」を表す言葉と考えるのがよさそうだ。しかし、問題は『源氏物語』の主な諸本が軒並み「あいたちなし」と表記していることである。¹³『日・国』の「あいだちなし」の項の「語誌」の二番目には、

語源については、「愛立つことなし」の意かといわれる〔和訓栞・大言海〕。しかし、中古においては「愛」という漢語が仮名文で一般化していなかったと思われ、従いがた「い。「あいだち」は「間立ち・間隔」の意とする説〔大日本国語辞典〕が妥当か。そうとすれば歴史的かなづかいは「あひたち」となる。とある。

十世紀の後半頃から語頭以外のハ行はワ行子音に合流したと考えられており、『源氏物語』成立時にはすでに「あいたちなし」と発音されていたものが表記にも反映されたのだろうか。だが、表記は表記上の規範に縛られる側面があり、保守的なものである。発音が変化しても表記には古形が残ることも多い。賀茂真淵も指摘していたように、伝統的に「間」は「あひ」で「愛」は「あい」と書かれていたのである。一四世紀に成立し、

中世のあいだ仮名遣いの規範となった行阿の『仮名文字遣』（京都大学図書館本）では、「間」は「あひた」となっており、「間」に由来する語であれば、この頃までの規範的な表記では「あひ」と書かれた可能性が高い。また、物と物の間を意味する「あい」には、間とも合とも漢字を当てるが、どちらも表記は長い間「あひ」と書かれるものであった。¹⁴

そして、よく知られているように、平安時代の仮名文では愛情を表現するときに「愛」という語を使うことはまずない。愛が使われるのは漢文訓読などの外来語の文脈が多く、「愛敬」や「恩愛」など漢文か仏典由来の言葉、しかも「愛」単独ではなく、複合語になっていることがほとんどである。愛情を表す「愛」の使用は歴史が浅く、「愛」を語源として取らなくてもよいのではないかと思う。

『増鏡』の「あいだちなし」の部分は、諸本によっては「あいだてなし」となっているものもあり、『日・国』「あいだちなし」の語誌に「(3)近世、用いられる「あいだてない」は、この語の変化した語か。」とある。『日・国』で「あいだてない」を引くと、先に紹介したように「①度が過ぎるさま。むやみやたらだ。途方もない。②わきまえがない。無分別だ。無慮だ。無思慮だ。考えがない。③遠慮がない。ぶしつけだ。④わがまま。勝手気ままだ。⑤盲目的にかわいがるさま。猫かわいがりだ。」の五つが挙げられている。いずれも「間隔がない」から派生した意味とみて矛盾がなく、やはり「あいだてなし」は

「隔てがない」が根幹の意味だったと思われるのである。

なお、中世の後半には「あいだてない」の形に変化していたようで、室町時代の抄物の中に用例が確認できる。桃源瑞仙『史記抄』（文明九年 京都大学蔵本）巻十四「汲鄭列伝」「或父子相食」の注には、

日本ニエセヌ事ソ。唐土ハ人ノ氣力大テ、易子食ナント、云テ、我カ子ヲ食ヘハアマリアイタテナサニ、人ノ子ニ換テ食ソ。

とある。皇帝の命を受けて任地へ赴く途中、飢餓に苦しむ農村を見た汲鄭は、緊急時用の蓄えを放出して民衆を救うのだが、その村がどれほどひどい有様になっていたかを示すのが「父子相食」である。その解説として「親子が互いを食べるということ（日本では行わないことである。中国の人々は気が大きいので、簡単に子を食えるなどと言って、さすがに自分の子を食べるのはあまりに分別がないというので、他人の子と取り替えて喰うのである）」と書いている。¹⁶ この「あいだてなし」は「無分別」でよいだろう。これは講義を書き取ったノートのようなもので、ここには当時の口語表現が随所にみられる。「あいだてなし」は口語的表現であった可能性があり、そのため作り物語や記録などにはあまり出てこないのかもしれない。

慶安二（一六四九）年刊の木下勝俊『萃白集』¹⁷には
五日のつとめて、小田原といふ所の宿にとまる。あくれハ、たまたれのかかめに酒すこし入れて、ちまきめくもの

御前にとてさしいつ。あるしのおとこにやあらん。けふは
 めてたきせちに候。一盃けしめされ候へかしと。あいたち
 なくいふもかほまほられぬへし。しどけなきことうちかた
 りて。いましはしねまり申へいを。某かたむなのえらまか
 らんとてたちぬ。かれかふるまひにつけても…

とある。小田原に宿を取ったとき、その主が木下勝俊にめで
 たい五月五日の節句だからと「あいだちなく」酒を勧め、「し
 どけなき」事を語ったというのである。この「あるしのおと
 こ」は、当時、文化的に遅れた地域と見做された東国の人であ
 る。方言丸出しの主の言葉遣いといい、全体的に洗練されてお
 らず、相応の人物に対する礼儀も分かっていない（あるいはも
 てなしの心が空回りしている）ようである。これも「わきまえ
 がない」とか「ぶしつけである」という意味で取ってよいだろ
 う。

狂言「荷文」（絵入続狂言記 元禄十三年刊本）¹⁸にも、この
 ように出でくる

…まだ有は、「海ならば滄溟海、山ならば須弥山」、是を聞
 け、扱もくあいだてないことを書き入てをかれたは。

主人に恋文を届けるよう言われた太郎冠者と次郎冠者が途中で
 手紙を開いて見る場面である。主人の大げさな口説き文句をあ
 げつらつていくところで「あいだてなし」が用いられている。
 須弥山まで持ち出すとは、随分とおおげさで途方もない口説き
 文句だ、という意味だろう。

つまり、「あいだちなし」は隔てや区別のない有様を原義と
 する語で、「あいだてなし」に語形が変化しても根源的な意味
 は失われておらず、「間立無し」と理解しておいてよいものと
 思われるのである。

おわりに

「あいだちなし」をめぐる揚げ足取りのような論を展開し
 てみた。古い時代に用例が少なく、解釈によって意味が揺れた
 ため、後世に語義が分からなくなっていったものと思われる。
 『増鏡』解釈では大正一四年を境に解釈が変わることが確認で
 きたが、その原因はついに分からなかった。そこで、最後にこ
 のあたりで「あいだちなし」の意味解釈に画期となる何かが
 あったのか、辞書類を参照してみたい。

大槻文彦『言海』¹⁹が明治二二年から二四年にかけて刊行され
 た。「あいだちなし（あいだてなし）」を引くと、「あいだちな
 し（形）あひだちなしノ音便」「あいだてなし（形）あいだち
 なしの転、あひだちなしニ同ジ。」となっている。「あひだちな
 し」を見てみると、

あひーだちーな・し・キ・ケレ・ク・ク（形）〔間断無シ
 ノ義ナラム〕分ケ隔テ無シ。分別ナシ。アイダテナシ。
 （此語、多クハ、音便ニ、あいだちなしト記セリ）

となっており、「間断無し」を語源とし、「隔てがない」のを根

幹の意味として捉えていることが分かる。また、「あいだてない」が生きた言葉としてこの頃まで用いられていたことも分かる。

その後、大正四（一九一五）年から八（一九一九）年にかけて、上田万年・松井簡治による『大日本国語辞典』（富山房）が刊行された

あいだてーなし（形）〔前条の転〕①あひだちなしに同じ。

②分別なし。すじみちなし。とはうもなし。理にはづれたり。狂言荷文「海ならば蒼冥海、山ならば須弥山。是れを聞け。扱も扱も、あいだてないことを書き入れておかれたは」（諺）あいだてないはば育ち 祖母に育てられたる子は、常にあまやかさるれば無作法なること。祖母育ちは三百やすいの類。

あひだちーなし（形）〔間隔（アヒダチ）なき義か。一説、愛だちにてあいだちなりと〕分け隔てなし。愛想なし。すげもなし。わけもなし。源宿木「世を思ひ給へ乱るることのみなんなりにたると、あひだちなくぞ、うれへ給ふ」同夕霧「心よからずあひだちなきものに思ひ給へる、わりなしや」増鏡上「例の遊女えもいはずさうぞきて参れり。頼朝うちほほゑみて、橋本の君に何をかわたすべきといへば、梶原平三景時とりあへず、ただそま山のくれであらばや。いとあひだちなしや」

（ここでは「あいだちなし」と「あいだてなし」は区別されてお

り、意味もそれぞれ異なっている。「分別なし・すじみちなし・とはうもなし」の「あいだてなし」に対し、「あいだちなし」は言葉の意味に一貫性がない。「分け隔てなし」と「愛想なし」と「わけもなし」が並列されているのは違和感を感じる。どうしてこうなったのか分からないが、用例を見ると、源氏物語の解釈などが影響しているのかもしれない。

次に挙げるのは近松門左衛門の語彙を集めた辞書だが、「あいだてなし」の項にはこのようにある。

*あいだてなし 一つの我が命二人の子供に引分けて、譲ると思うて死する身が、生きたからうか惜しからうか、あいだてなしとも狂気とも、笑はば笑へ（用明天皇）あひだちなし（間断無）が音便で「あいだちなし」となり、さらに転じて「あいだてなし」となる。分別がない。理に外れである。本朝俚諺（正徳四年序）に、「あひだてなし。今是不相應の事をあいだてなしと云」（上田万年、樋口慶千代共撰『近松語彙』富山房 昭和五（一九三〇）年）

用例として引かれている「用明天皇」は「用明天皇職人鑑」のことで、宝永二（一七〇五）年竹本座初演の浄瑠璃である。これは「無分別」と解釈できるもので、近世に用いられた「あいだてなし」の意味に矛盾しない。撰者は「間断無」を語源とし、その音便変化した語と捉えている。昭和になっても「あいだてなし」はそのような語として理解されていた。撰者の一人、上田万年は『大日本国語辞典』の編纂にも関わっている

が、『大日本国語辞典』は「あいだてなし」を「あいだちなし」と同義の語ともしている。そうすると、「あいだてなし」は「あいだちなし」の延長線上にある語ということになり、両者とも「間断無」を基本に意味を解釈するべきではないのか。語形が変化したことによって、意味の区別が生じた可能性はあるが、中世の「あいだちなし」を「愛想がない」と解釈する積極的理由がやはり見つからないのである。

後注

- * 1 第二版（二〇〇〇年刊）を使用した。
- * 2 以下『源氏物語』の引用は岩波の旧大系に拠った。本文の質を考えるとき、三條西実隆の校訂本が、素性も含めて簡易に参照できる青表紙本系本文としては優良と思われるからである。
- * 3 色好みの老女として描かれる源典侍が、紅葉賀巻で光源氏に「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」を引用して呼びかける場面がある。「駒もすさめぬ」は男女の性的関係を匂わせた露骨な呼びかけであると見てよいだろう。
- * 4 日本文学古注釈大系に拠った。
- * 5 源氏物語古注釈集成に拠った。
- * 6 もちろん、「この歌も不愛想な（味もないつまらぬ）御歌などではあるよ。」（山岸徳平、岩波旧大系）という解釈がないわけではない。このやや風雅さを欠く率直なやりとりの中には、長年連れ添った夫婦の、男女の隔てを超えた信頼関係を読み取るのが正しいのではないか。
- * 7 ただし、これまでの解釈を読んで、紹巴抄がそのように文脈を理解できているかどうかについては疑問が残る。雲居雁が夕霧を身勝手な男だと非難していると受け取っている可能性も充分ある。
- * 8 国会図書館本に拠った。
- * 9 『湖月抄』では単に「抄」としている場合、特定の注釈書ではなく季吟が参照した諸注を指す。
- * 10 旧大系・山岸徳平の注も「氣にくわなく、無愛想な無作法な者として、夕霧が考えなされたのは無理であるよ。「あひ（間）だち（立）な（無）し」又は「あひ立てなし」とも言う。一説には「愛だちなし」とも。」となっている。語源を挙げておきながら、「間立無し」の意味はあまり反映されていない。
- * 11 中野幸一の『正訳源氏』のみ、「あいだちなし」を一貫して「遠慮がない、隔てがない」の意で訳している。これが正しいのではないか。
- * 12 旧大系・山岸徳平の注は「いかにも不相応に訴え（愚痴をこぼし）なされる」となっていて、「間立無し」の意を踏まえているのかいなのかわからない解釈になっている。
- * 13 『源氏物語別本集成』で確認したところ、表記は「あいだち」で統一されていた。ただし、岩波旧大系の底本となった三条西家本は、夕顔の用例のみ「あひだちなき」となっている。
- * 14 例えば、『色葉字類抄』では、川合を「カハアヒ」としている。
- * 15 院政期頃から和文で「愛す」の使用が見られるようになるが一般的ではなく、現代語との意味合いも異なる。「愛す」には人間がペットを可愛がるような一方的で支配的なニュアンスがあり、作り物語の口説き文句などにはまず出てこない。仮名遣いも「あい」と「あひ」で揺れがあり、規範的表記が定められていた形跡がない。中世末期に來日したキリスト教宣教師が、「神の愛」を伝えようにも「愛」に相当する適切な言葉が日本語になく、「御大切」と訳した（どちりなきりしたん）岩波文庫）のは有名な話であろう。
- * 16 この解釈は微妙に間違っていて、「父子相食」は親子が互いに違いを食らうような飢餓の極限状態を表現した語であって、実際の食人の様子がどうであったかという話ではない。

* 17 調査は版本に拠った。木下勝俊は豊臣秀吉の甥であり、戦国大名だが、歌人の木下長嘯子としても知られている。中世の末から近世初期にかけて活躍した人物であり、用いられている言葉には中世までの言葉遣いが反映されているものと思われる。

* 18 『狂言記』（岩波新日本古典文学大系）に拠った。

* 19 日本初の近代的国語辞典である。私費による出版なので出版社は不明。「あゝお」掲載の第一冊は明治三二年五月刊行